2025年4月27日　説教「風と荒波とをしかり」

ルカの福音書8章22～25節

イースター礼拝を越えて、元のルカの福音書に戻ります。今朝の聖書箇所は、多くの方がよく知るところです。8章前段では4つの種のたとえ話、あかりのこと、イエスの真の兄弟の記事がありました。

１．舟を出して（22）

①湖の向こう岸へ（22）**「そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、『さあ、湖の向こう岸へ渡ろう』と言われた。それで弟子たちは舟を出した。」**

冒頭は少し持って回った言い方です。「そのころのことです。ある日、イエスは‥」とした方が良さそうです。場所はガリラヤ湖の西北にある町、カペナウムであったと思われます。イエスは弟子たちと舟の上にいました。そこで教えておられたのかもしれません。するとイエスは言われたのです。「さあ、湖の向こう側に渡ろう」。西岸から湖を越えて東側に渡ろうと言われたのです。おそらくは、東岸のゲラサを目指していたと思われます。弟子たちは言われるがままに舟を出しました。

２．危険な事態に（23～24a）

①舟の上で眠るイエス（23）**「舟で渡っている間にイエスはぐっすり眠ってしまわれた。」**

湖は穏やかであったようです。おそらくは漁師であるペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネなどが、舟のかじ取りをしていたことでしょう。舟が湖上を進む間、舟を操るほかは、和やかに談笑していたか、それとも信仰の話をしていたかはわかりません。一方、イエスはともの方で休んでおられました。日頃の激務のゆえに、ぐっすりと眠っておられたのです。

②突風が吹き降ろし（23）**「ところが突風が湖に吹きおろして来たので、弟子たちは水をかぶって危険になった。」**

ところが、天候が俄かに変わってきました。なんと、突風が吹きおろしてきたのです。ガリラヤ湖は地中海の海面からすると211メートルも低い所にあります。そこで地中海方面からヘルモン山などを経て来る風は、まさに吹き降ろすようにして突風となることがあるのです。彼らの乗る舟は波で木の葉のように揺さぶられ、舟は水をかぶって、弟子たちも水に塗れ、危険な状態となり、弟子たちは大慌てです。

③溺れて死にそうです（24a）**「そこで、彼らは近寄って行ってイエスを起こし、『先生、先生。私たちはおぼれて死にそうです。』と言った。」**

この緊急事態のなか、弟子たちは焦りまくりました。危うくなった命を守ることで必死です。漁師たちもいたのですから、できる限りのことはしたでしょう。しかし、いかんともしがたい状況なのです。ところが、こんな中でも、イエスは眠っているのです。いったどういう神経なのかと思ったことでしょう。弟子たちは、イエスを揺すり起こし、「先生、先生。私たちは溺れて、死んでしまいそうです！」と訴えかけました。

３．風も水もお命じになるとは（24ｂ～節）

①風と荒波を（24ｂ）**「イエスは起き上がって、風と荒波とをしかりつけられた。すると風も波も収まり、なぎになった。」**

　すると、イエスは目をさまし、おもむろに立ち上がりました。そしてなんと、舟に襲いかかっていた山からの吹き降ろしてきた大風とそれに伴う荒波を叱りつけたのです。人を叱るということはよく聞くことですが、風と波を叱るというのは聞いたことがありません。しかし、イエスからの言葉が発せられてすぐ、その風と波とはイエスの命令に従うかのように、収まったのです。そして、湖は凪になりました。

②あなたがたの信仰は（25a）**「イエスは彼らに、『あなたがたの信仰はどこにあるのです』と言われた。」**

　波が凪いだ直後、弟子たちからすれば危機から脱出し、ほっとして息をついていたところです。イエスは弟子たちに言われました。「あなたがたの信仰はどこにあるのですか」。イエスは風が収まったことに関してではなく、弟子たちの信仰に関して語り始めたのです。その御姿はいとも自然ですが、そのお言葉は肺腑に迫ってくるようでした。弟子たちは、主が言われる、自分たちの信仰がどこにあるのかという問い掛けを、真正面から突き付けられたのです。

③いったいこの方は（25ｂ）**「弟子たちは驚き恐れて互いに言った。『風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。』」**

　ただ弟子たちは、当面ただ驚くばかりでした。また恐れを持つばかりでした。だからこそ、互いに言い合ったのです。『風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこの方はどういう方なのか』。弟子たちは、イエスに従ってきました。また、主として信じてきました。しかし、イエスがどういう方かということについて、さらに深く知らなければならなかったのです。

《結論》　今朝もこの聖書箇所から三つのポイントで考えます。

　第一は、大風のなかでも眠っておられたイエス・キリストについてです。ここで、イエスが眠っている記事を読み、ほっとしたと思う人と、どうして弟子達が困っているのに眠っておられるのだと疑問に思った方がるでしょう。ほっとした人は、イエス様もお疲れになり眠られたのだということを確認されたからでしょう。まさに、イエス・キリストは「完全なる神なる方で、完全なる人間」です。これを二性一人格といいますが、人間イエスは涙も流し（ヨハネ 11:35）、眠りもされたのです。私たちと同じ肉体を持って生きてくださったのです。しかし、イエスは神なる方です。詩篇 121：3～4 には、「主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない」とあります。イエスは舟の上で眠っておられましたが、終始見守ってくださっていたのです。そのことを覚えることがまず大切です。主は弟子達が困難を迎えている時も、一方では、まどろむことなく、彼らと一緒にいてくださったのです。

　第二に、「あなた方の信仰はどこにあるのか」というお言葉についてです。ルカの福音書では、ここまで母マリヤの信仰（1 章）、中風を患った人を運び屋根の上からつり降ろした男たちの信仰（5 章）、百人隊長の信仰（7 章）、香油を御足に塗った女の信仰（7 章）などが記されてきました。ところが、ここでは弟子達に「あなた方の信仰はどこにあるのか」と厳しく戒めておられます。お言葉を言い換えれば、「あなた方の信仰はあるべき所にない」ということです。つまり、いかなる事態にあっても、イエス・キリストを見上げ続けるという信仰です。あるいはその覚悟です。イエスは 12 弟子を特別に育てようとされているのです。イエスは眠っておられましたが起きておられました。一方、弟子達は起きていましたが、その信仰は眠っていたのです。この厳しい主のご指摘について、私たちも受け止めていきたいのです。自分の信仰をどこにあるのかと、問い直していきましょう。

　第三に、風と荒波という舟の上の困難を静められたイエスについてです。イエスが風と水を従わせたことに、弟子達は驚き恐れたとあります。イエスは確かに風や荒波をしかりつけたのです。風や水をご支配し、お言葉をもって凪を与えられました。詩篇 89 篇 8、9 節に「万軍の神、主。だれが、あなたのように力がありましょう。主よ。あなたの真実はあなたを取り囲んでいます。あなたは海の高まりを治めておられます。その波がさかまくとき、あなたはそれを静められます」とあります。イエスはこのお言葉を実現してくださったのです。翻って、私たちの人生にも、弟子達が遭遇したような大風や荒波がやって来ることがあります。あの漁の専門家たちが、よくわかっていると思っていたことに、おじ惑ったように、私たちも思ってもみなかったことに、慌てたり、焦ったり、右往左往したりすることがありましょう。しかし、その時にこそ、風と水をもご支配されている主イエスに依り頼みましょう。主は、私たちに降りかかる大波にも、凪を与えてくださるのです。いかなる試練にも、主は脱出の道を備えてくださっているのです（Ｉコリント 10:13）。